社会・環境

■語る会に向けての検討の経緯：論点と提案■

＜第１回　５月２５日＞

・小学校，中学校双方の子どもの実態について情報交換を行う。
・普段の授業づくりについて，小中それぞれの特質を明らかにする。

＜第２回　６月２１日＞

・小学校，中学校双方の学習内容を検討し，互いに関連する内容を洗い出し，小中の接続をどう図るかについて意見交換を行う。

＜第３回　７月２７日＞

・小中の社会科の内容や方法の違いを前提としながら，一貫教育の視点をどう組み立てていくかについて意見交換を行う。基本的には，育てたい社会的見方・考え方を共通にして，同じ視点から特設単元を設定して授業公開する方向とする。

＜第４回　９月２６日＞

・小中７年間の社会科学習を，地理的内容，歴史的内容，公民的内容から整理し直し，それどれを組み立てている視点を確認するとともに，各学年における重点指導事項を明らかにしていく。

＜第５回　１０月１３日　及び第６回　１０月２４日＞

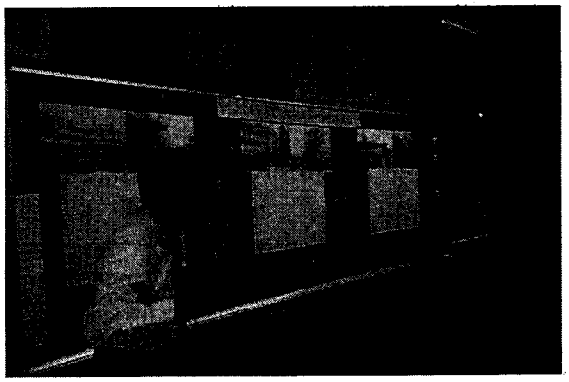
・語る会の指導案審議を行い，各授業における主張点を明確にする。特に，授業で見られる子どもの姿から一貫教育の中身を探っていき，それについて分科会のフロアーから広く意見を求めるような分科会にしていくことを確認する。

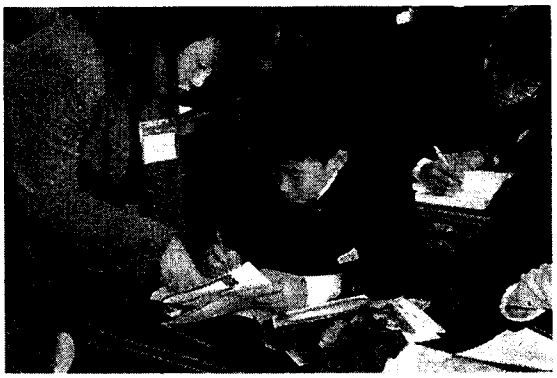
＜第７回　１１月　８日＞

・語る会指導案の最終審議を行うとともに，公開授業における主張点を確認する。

＜第８回　１２月１５日＞

・語る会授業についてのふりかえりを行う。特に確認したのは，どの学年においても資料の読み取りや提示については丁寧なはたらきかけが必要であるということや，小中における学習機能のつなぎを明確にすることなどである。





【教科リード】

1　現状と課題

社会科は小中一貫して，子どもの社会認識を育てていくことが教科の大きな使命である。ただし，その社会認識は，社会科の中だけで育っていくものではない。幼児期に，自分を中心として存在している「まわり」を子どもがどう認識し，それを子どもがさまざまな関わりの中でどう価値づけ，新たな関わりを見つけだしていくかということが大きなテーマとなる。幼児期に培われていく社会認識を，小学校・中学校という学校段階において，さらに確かなものにしていくのが社会科の役割である。社会に生きる人間として，社会をどのように見つめ，社会にどのように関わっていこうとするのか，人間としての生き方を形づくっていく基になるものである。こうして考えてみると，小学校から中学校へ，社会科という教科の中だけで社会認識が形成されていくのではなく，幼児期から子どもが自分のおかれている環境と関わっていく過程がより重視されなければならないことに気づく。

さて，その社会科を取り巻く状況は決して楽観視できない。学ぶ子どもたちの多くは，社会科を暗記教科だと思い込み，覚えることが多すぎると言って嘆いている。先般行われた県の学力調査の結果からいえば，社会的事象に対する基礎的知識はあるが，それらを総合して判断していく力が十分についていないことがうかがえる。つまり学習したことが暗記しただけの羅列的な知識になっていて，実際に社会で起こっている事象に応用させていくことができにくいのではないかと考える。

教える教師側としては，教える内容が多いわりに，社会科が子どもたちにとって生きて働く力となるような授業を十分実現できていないというジレンマを抱えている。授業を構想していくときに，生きた社会をどのように子どもに見せるのか，関わらせるのか，具体的な視点が明確でなく，教科書に盛られた内容を丁寧に解説していくような授業が行われる傾向にあるといってよい。

子どもたちが学習している内容に目を向けてみると，小中７年間が決してバラバラに構成されているわけではない。小学校では，子どもの社会認識が同心円的に拡大していくという原理を基にして，社会的事象を具体的事例を基にしながらより包括的総合的に概観しながら，自分との関わりを意識していく方向で内容が構成されている。

これを踏まえて中学校では，より学問的な見地から，地理的分野（世界と日本の地域構成，地域の規模に応じた調査，世界と比べて見た日本），歴史的分野（歴史の流れと地域の歴史，古代までの日本，中世の日本，近世の日本，近現代の日本と世界），公民的分野（現代社会と私たちの生活，国民生活と経済，現代の民主政治とこれからの社会）の３分野から内容が構成されている。

こうしてみると，一見，似たようなことを７年間の中で繰り返し学習しているように見える。学習指導要領には学習内容の系統については具体的記述はない。唯一，中学校編の「指導計画の作成と内容の取扱い」において，次のように記述されている。

> 「指導計画の作成に当たっては，次の事項に配慮するものとする。
> (1)　小学校社会科の内容との関連及び各分野相互の有機的な関連を図るとともに，地理的分野及び歴史的分野の基礎の上に公民的分野の学習を展開するこの教科の基本的な構造に留意して，全体として教科の目標が達成できるようにする必要があること。」　　（下線は筆者）

つまり，小学校・中学校各々が，それぞれの目標に照らして，その時期固有の役割をよく考えながら指導計画を立てて授業をしていくことが，一貫教育の実現に向けての第一歩であると考えられる。

2　幼小中一貫教育に向けて，大切にしたいこと

小学校の社会科と中学校の社会科の大きな違いは，社会を認識していくときの子どもの視点，あるいは視野の置き方にあるといえる。小学校では，子どもの発達段階を念頭に置きながら，学年が上がるに従って，同心円的により広い視野から社会を見つめ，社会と自分との関わりを強めていくように内容が構成されている。これに対し，中学校では，我が国と世界との双方を，地理的分野，歴史的分野，公民的分野から見比べながら，さらに広い視野に立って公民的資質を培おうとしている。

また，このように内容構成の基本的考えが異なることに伴って，授業スタイルもずいぶん違っている。双方とも問題解決的な学習を基本原理としながらも，学年段階が上に行けばいくほど，系統的な学習にならざるを得ないという状況もある。

こうした現状を踏まえて，社会科７年間のカリキュラムをどう編成していけばよいだろうか。具体的な方策としては，「内容の再構成」という方向性が考えられるが，現実的ではない。先にも述べたように，小中双方が歩み寄り，例えば，小学校の立場から言うと，中学校はもっとこうあるべきだというような意見交換が行われるべきであると考えている。今回の語る会で，社会科では特にこの点を大切にしたいと考えた。

これまで，小学校と中学校が別々に考えてきた社会科のカリキュラムを，互いを見つめながら，あの時期にこういう学習をするから，ここではこういうところまで扱うようにしようというような，小学校中学校双方からの歩み寄りの姿勢をもつことが急務であると考えている。社会科学習７年間の歩みの中で，どこがどうつながっているかを意識しながら授業を構想していくことによって，「どこまで扱えばよいか」，「どこまで深めるべきか」について，ある程度のめどが立つのではないだろうか。

今後こうした議論を深めていく上で，一貫教育に向けて検討を要する一般的課題を列挙しておく。

○小学校における課題

・体験活動重視の問題解決的学習を柱としているため，基礎的な知識や技能の定着が十分に図られていない傾向にあること。

・中学年と高学年の内容の段差が大きく，第５学年以降，急激に「暗記的内容」と子どもたちが感じてしまう傾向にあること。

○中学校における課題

・活動から学ぶというよりは，知識注入型の学習になりやすく，問題解決的な学習による思考力・判断力の育成が十分に図られていない傾向にあること。

○小中接続に関わる課題や小中共通の課題

・地図の見方や年表の読み方などのいわゆる「学習技能の指導」が，系統立てて行われているとはいえない状況にあること。

・学習したことと現実の社会の問題をつなげて考える授業が意図的に行われにくいために，子どもの社会的事象に対する興味・関心や生きて働く力が十分に高められていない状況にあること。

小学５年１組　社会科学習指導案

指導者　　吉　崎　　朗

1　単元名　　ディスカバー日本　～　私たちの国土の自然と人々のくらし　～

2　授業の構想

(1)　４月，社会科の最初の時間に，子どもたちに何も見せずに日本地図を書かせてみた。子どもたちは，日本が４つの大きな島から成り立っていることはある程度とらえていたが，表した地図はそのほとんどが丸や長丸を使ったものであり，その形や位置関係については十分にとらえていない者がほとんどであった。現行の学習指導要領において，国土の様子を概観する学習が４年生から５年生に移行し，４年生段階において日本全体の形や位置関係をつかむ学習が行われなくなったため，このような状況にあるのも無理からぬことと考える。

また，これまでの第１次産業や第２次産業の学習の中で，例えば，地図帳等を活用して日本全体の中での庄内平野の位置であるとか工業の盛んな地域をとらえることを行っているが，それはあくまで，国土全体の中での位置関係をとらえることが中心となっている。そのため，ある程度日本列島の形や位置関係はつかんではきているものの，地形や気候といった具体的な国土の様子の理解に至っている子どもはほとんどいないといった状況である。したがって，本単元の学習において，子どもたちは，初めて本格的に国土の地形や気候の特色，アジアの中での国土の位置，特色ある地域の人々の生活の様子などを学ぶことになる。

(2)　我が国は，北海道，本州，四国，九州の大きな４つの島から構成されている南北約3000kmにわたる弧状列島である。周囲には，沖縄諸島，北方領土などの島も数多くあり，国土の北端は択捉島，東端は南鳥島，西端は与那国島，南端は沖の鳥島である。また，アジア全体からとらえると，ユーラシア大陸の東に位置し，海を隔てて韓国，中国，フィリピンなどの国々と隣接している。

地形的には，山地が多く，山地は森林に覆われており，大きな平野が少なく，そこを流れる川も短いものが多いという特徴を持っている。気候的には，四季の変化が見られ，国土の南北，太平洋側と日本海側では気候の様子に違いがあるといった特徴を持っている。さらに，様々な地域にくらす人々は，その土地の気候条件を生かしながら自然環境に適応して生活している。

本単元では，子どもたちは，このような国土の位置，地形や気候の特色，気候条件から見て特色ある地域の人々の生活の様子を，地図や地球儀を活用しながら，さらには，地図を書いたり統計資料などを読みとったりといった作業活動をしながら学んでいくことになる。その際には，まず，地図や地球儀を有効に活用していくことを考えていかなければならない。先にも述べたが，小学校の社会科学習において，本格的に地図や地球儀を活用できる初めての機会である。特に地球儀の活用においては，平面図で表した世界地図とのちがいも明確にしながら，立体的に地球全体をとらえること，さらにその中におけるわが国の位置を，経度や緯度に基づいてとらえることなどを大切にしていく必要があると考える。また，気候の違いや特色ある地域の人々の生活の様子をとらえていく際には，太平洋側と日本海側，日本の北と南といったように「比較して考える」ことを大切にしていきたいと考える。「比較する」ことは，事象をより具体的にとらえることにつながるものであるし，比較した事象を関係づけて考える力を育成していくことにもなると考える。

なお，本単元の学習は，中学校の地理的分野における「日本の地域構成」，「様々な面からとらえた日本」の学習と密接につながっていくものである。「日本の地域構成」の学習では，地球儀や地図を活用して，世界的視野から国土の位置や領域の特色を追究したり，都道府県などに着目して様々に地域区分できることをとらえたりする学習を通して，国土の地域構成を大まかにとらえることを主なねらいとしている。「様々な面からとらえた日本」の学習では，世界的視野から日本を一つの地域として追究することによって，また，日本全体の視野から大まかな国内の地域差を追究することによって，我が国の国土の特色をとらえさせるとともに，地域間を比較し関連づけて地域的特色を明らかにする視点や方法を身につけさせることを主なねらいとしている。このようなねらいを踏まえれば，本単元の学習は，中学校において身につけるべき知識・能力の基礎を育成していく学習として位置づけるこ

とができる。したがって，地球儀や地図を活用する時間をできる限り確保し，本物に触れ，具体的に位置関係等がとらえられるようにしていくことを大切にしなければならないと考える。また，「比較して考える」ことを学習の中に位置づけ，違いや関連することを見つけていく活動を大切にしていくことが必要となってくる。さらには，自然環境に適応する形で気候の特色を生かした生活の様子を学ぶ地域事例は，中学校においては扱うことがないため，そのことも踏まえてこの段階における学習内容を考えていく必要がある。

(3) そこで，本単元では，まず，地球儀や地図を実際に手にしたり，特色ある地域の写真，雨温図等の図表を読みとる活動を大切にしていくことによって，中学校における地理学習の基礎を培っていきたいと考える。

第１次は，国土の位置や地形や気候の概要をつかむことが学習の中心となる。まず，導入では，地球儀を教室にできるだけたくさん持ち込み，実際に触れたり眺めたりしながら地球上における日本の位置を確認していく。その際には，地球儀で表されている各国の形と，メルカトル図法による世界地図で表された各国の形を比較することによって，実際の国の形とメルカトル図法で表された国の形の違いや日本から見た位置関係の違いについても確認していきたい。また，経度や緯度をもとに地球上における位置を表す表し方を紹介することによって，経線や緯線の存在にも気づかせていきたいと考える。

次時は，実際に日本列島の地図を書いたり，我が国の東端，西端，南端，北端を見つけていくことによって領土の範囲を確認したりしていく。ここでは，子どもたち一人ひとりが地図を書いたり，地図帳を使って自分で東端，西端，南端，北端を見つけたりする作業を大切にし，実感を伴った理解となるよう配慮することが必要であると考える。さらに，我が国だけではなく，国境を接する周りの国国にも目を向け，その国との位置関係やその国の国旗に着目することによって，アジア全体に視野を広げるとともに，国旗の指導にもつなげていきたい。

次時は，我が国の地形や気候の特色をつかむ学習である。まず，地図帳を使って我が国の主な山地や山脈，平野や盆地，川などを調べ，それを白地図に書き込む作業を行っていく。そして，自分たちが完成させた地図をもとに我が国の地形的な特色について話し合っていくことによって，「山がちで森林に覆われ，大きな平野が少ない」，「本州の中央部に山脈が連なっている」といった特色をつかませていきたいと考える。気候については，テレビで流される全国の天気予報図や特色ある地域のくらしぶりを示す写真などを使って，特に冬の時期の各地の天気の違いを取り上げて，同じ季節でも北と南，日本海側と太平洋側ではずいぶん天気の様子が違うことに気づかせていく。そして，その違いを明確にしていくことによって，我が国の気候の特色をとらえさせていきたいと考える。

第２次は，気候条件から見て特色ある地域やそこでの人々のくらしの様子を探っていくことが学習の中心となる。代表地域としては，沖縄と北海道を取り上げる。沖縄のくらしの様子を収録したビデオ等をもとにして，土地の様子や気候の特色，そこでくらす人々の様子をとらえさせていく。また，アメリカの軍事基地が島の大部分を占めているという事実をもとに，沖縄の抱える問題点にも目を向けていきたい。北海道においても同様に，土地の様子や気候の特色，そこでくらす人々の様子を，ビデオ等をもとにしてとらえさせていく。また，北方領土の問題にも触れることによって，北海道の抱える問題にも目を向けていきたい。そして，本単元の最後には，これまでの学習をふりかえり，自分の行ってみたい場所やこれまでに訪れて印象に残っている場所の中から自分のおすすめの場所を一つ選ばせ，その場所やそこのよさを紹介し合う活動を設定していく。そのことによって，我が国の美しい自然を愛する気もちやそれを後世にまで引き継いでいくことが大切であるという気もちを培っていきたいと考える。

本時は，第１次の６時間目である。松江，高松，高知という中四国地方のほぼ同じエリアに位置する３つの都市の気候の様子を取り上げ，それぞれに気候的な特色があり，同じ季節でも気候の様子が違ったり，年間を通して雨の降り方が違ったりすることに気づかせていく。その際には，同じ季節の町や人々のくらしの様子を写した写真や雨温図を活用していく。そして，ほぼ同じような地域にあるのにどうして気候に違いがあるのか，その理由を予想したり地形と季節風の関係図（夏・冬）をもとに考えたりしていくことで，気候を決定づける条件の１つに地形や季節風の影響があることに気づかせていきたいと考える。また，学習をふりかえる場面では，全国的な気候の特色はどうなのかといったことにも目が向くよう，はたらきかけを行っていきたい。

3　活動展開計画（全１４時間　本時６／１４）

次	主な学習活動	時	具体的な学習活動
1	○わたしたちの国土の様子や自然の特徴を調べよう	1 2 3 4・5 ⑥・7	・地球儀や地図帳を使って日本の位置を調べたり，経度や緯度による位置の表し方を知る。 ・日本地図を実際に書いて国土の形をつかんだり，東端，西端，南端，北端を見つけ国土の広さをつかむ。 ・我が国の周りの国を調べ，その国の国旗を書く。 ・我が国の主な山地・山脈，川，平野，盆地などを調べ，我が国の地形の特徴を考える。 ・雨温図や写真等をもとに各地域の気候の特色を調べ，我が国の気候の特徴を考える。
2	○我が国の特色ある地域やそこでの人々のくらしの様子を調べよう。	8・9 10・11 12・13 14	・沖縄の気候や土地の様子について調べたり沖縄の抱える問題について話し合ったりする。 ・北海道の気候や土地の様子について調べたり北海道の抱える問題について話し合ったりする。 ・調べたり話し合ったりしたことをもとにして，沖縄と北海道のガイドブックをつくる。 ・我が国の中で自分にとってのおすすめの場所を決める。

4　本時の学習

(1) ねらい　松江，高松，高知の人々のくらしの様子や雨温図をもとにそれぞれの地域の気候の特色をつかむとともに，同じ地域，位置関係にありながらどうして違いが生まれるのか，その理由を既習事項や新たな情報をもとに考えることによって，季節風や地形がその地域の気候を特色づけていることを理解することができる。

(2) 展　開

学習場面と子どもの取り組み	教師のはたらきかけと願い
1　松江，高松，高知の今の時期のくらしの様子や年間を通しての気候の特徴を，写真や雨温図をもとに確かめる。 【松江】…・曇っているし，寒そうに人々が歩いているよ。 ・冬に降水量が多いよ。 【高松】…・よく晴れていて暖かそうだよ。 ・１年を通じて降水量が少ないな。 【高知】…・なんだかポカポカと暖かそうだ。 ・夏に降水量が多いよ。 ・気温の変化は３つの都市とも大きな違いはないな。 ・町の様子はずいぶん違いがあるな。 ・３つの都市とも同じような地域にあるのに，どうして降水量はこんなに違うのかな。	○　地図を使って松江，高松，高知の３つの都市が同じ中四国地区にあること，ほぼ同じ経線上にあることを確認することで，北海道と沖縄といったような距離的な違いがあまりないことに気づかせ，どうして気候的な違いがあるのかという問題意識を高めていきたい。 ○　同じ時期に３つの都市で撮った人々のくらしの様子や町の様子を写した写真や同じ日の天気予報図（日本海側が雨で瀬戸内，太平洋側が晴れのもの）を示し，３つの都市の気候の違いに着目させる。 ○　雨温図も提示し，それぞれの都市の気候の様子を丹念に読みとっていく中で，雨の降り方に着目させるたり，松江では冬は曇りの日や雨の日が多いのに，高松や高知は冬でも晴れの日が多いことを示したりすることで，気候の違いを明確にしていきたい。
2　本時のめあてを確認する。 ３つとも同じような地域（経度）にあるのに，気候の様子に違いがあるわけを考えよう。	○　子どもたちの素朴な疑問を集約する形で「どうして気候に違いがあるのか」といった問題意識にまで高め，めあてを提示する。
3　気候の様子に違いがあるわけを考える。 ・同じ時期（季節）なのにどうして違いがあるのかな。 ・松江が冬に降水量が多いのは雪のせいかな。 ・高知は夏に台風がよく来るから雨が多いんだ。 ・高松が雨が少ないのはどうしてかな。 ・何か地形が関係しているのかな ・中国山地や四国山地が関係しているのかな。 ・夏や冬に吹く季節風も関係していそうだ。 ・季節風が雨を降らせているんだ。	○　はじめは子どもたちの自由な予想を大切にしたいので，地図帳を活用しながら，これまでの地形の学習等で学んだことや自分たちが知っている情報をもとに，まず理由を考えさせたい。 ○　ある程度子どもたちの考えがでたところで地形と季節風の関係図（夏・冬）を提示し，雨の降り方等を読みとっていくことで，子どもたちの予想の確かめをするとともに，地形と季節風が気候の違いに影響を与えていることに気づかせたい。
4　今日の学習をふりかえる。 ・雨の降る量が違うわけがわかったよ。 ・季節風や山が関係するんだ。 ・日本全体ではどうかな。	○　本時の学習を通して気づいたことについてふりかえるだけでなく，日本全体ではどうなのかと投げかけ，次時で学習する日本の気候の特色にも目を向けさせていきたい。

中学１年１組　社会科（歴史的分野）学習指導案

指導者　　竹　崎　葉　子

1　単元名　身近な地域の歴史学習
～中世の日本海水運～なぜ出雲沖に朝鮮でつくられた陶磁器が沈んでいたんだろうか～

2　基盤

(1)　１年１組は，附属小学校から入学してきた生徒が約半数の１９名在籍する４０人学級である。小学校学習指導要領では，中世の学習内容について「源平の戦い，鎌倉幕府の始まり，元との戦い，京都の室町に幕府が置かれたころの代表的な建造物や絵画について調べ，武士による政治が始まったことや室町文化が生まれたことが分かること。」と述べられており，文化から時代をみる内容になっている。学級の生徒全員が“蒙古襲来絵詞”については，小学校で読み取りを行ったことをよく覚えていた。つまり，生徒たちは北山文化，東山文化，雪舟の水墨画などの文化についてはとても詳しく知っているが，中世の民衆史や経済史，守護と国司などの土地をめぐる争いなどについては中学校で初めて学んだことであり，中世の学習が進むにつれ少しずつ時代を立体的に捉えてきていると考えられる。

身近な地域については，地理的分野で調査学習を終えたところであるが，身近な地域の地形や地名などをほとんど知らなかったことに驚いた。本校は校区のない学校であるため，より身近な地域を感じにくいのかもしれない。しかしながら，どの生徒もこの学習にとても積極的に取り組んでおり，身近な地域について多少の知識を得て，興味がわいてきたところではないかと考えている。

(2)　中世の貿易について教科書では，元寇以降，中国との正式な国交はなく倭寇により密貿易や海賊行為が行われていたが，義満は倭寇を取り締まり，明と朝貢という形で勘合貿易を始め，朝鮮との貿易も同じような形で貿易を行ったというように述べている。幕府から勘合を与えられ貿易を行った守護として大内氏の名や，堺や博多の商人，朝鮮との貿易では対馬の宗氏が挙げられているが，実際はその他にも地方の有力な守護や商人が競って貿易に携わり力をつけていった。

中世は農業生産が高まり，手工業が発達したことにより物流が増大し，陸上のみならず船での運搬が盛んになった時代である。そして陸上交通の要所に関所が置かれたように，海上交通の要所にも関所が置かれており守護たちは競って海の道をおさえようとした。守護たちが守護大名，そして戦国大名へと力を伸ばしていった背景には，国内の交易はもちろん中国，朝鮮との貿易による莫大な利益があったのである。

この国内外の交易によって力を伸ばしていったのが尼子氏である。出雲では商品として生産された物として，むしろ，鉄（奥出雲のたたら鉄），鋳物などがあげられるが，これらが交易品である。戦国時代以前，京極氏が守護であった頃には出雲国内では様々な国人が勢力をもっていた。松田氏は中海水運，そして美保関をおさえ日本海海運にも関わっており朝鮮とも交易をしていた。三沢氏は鉄の産出地の奥出雲を掌握していた。戦国時代に入り尼子氏はまずこれらの勢力を武力で制圧し守護代から戦国大名へと力をつけていった。

この単元では，通史学習として教科書を使って中世の単元を学習した後，身近な地域の歴史を取り上げ，通史学習の中で出てきた地域との関係性をつかみ一般法則性を発見することをねらいとしている。小学校では，３，４年の目標の(2)として「地域の地理的環境，人々の生活の変化や地域の発展に尽くした先人の働きについて理解できるようにし，地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにする。」という項目がある。この学習では，「地域の人々の生活について・・見学，調査したり年表にまとめたりして調べ・・」という内容になっており，地域の人々の生活自体が学習対象となっている。このような小学校での学習，つまり身近な地域の歴史を学ぶ力の上に，身近な地域と

他地域との比較学習によって関係性をつかむ力を育成していく身近な地域の歴史教材を使うことは，中学校での学習に慣れた中学校１年生後半から２年生には適切であると考える。

(3) 通史学習では歴史は自らとは関係ない歴史物語のようになってしまいがちであるが，身近な地域を学ぶことによって歴史を身近に感じることができるのではないかと考える。この単元では，身近な地域の文献資料を中心として中世の日本海海運を見直すことにより，私たちの住む出雲地方にも当時，朝鮮との交易を行っていた港があり，その港をめぐる戦いがあったことに気づかせたい。そして，出雲地方のみならず全国にも同じような港があったのではないかという一般性にまで視点が広がっていくことを期待したい。

3 本時の目標

○ 文献資料に出てくる地名を地図で探し，中世の交易ルートを自分なりに予測できる。（技能・表現）

○ 室町幕府がおこなった中国・朝鮮との貿易についての学習を振り返りながら，出雲と朝鮮貿易との関係性に気づき中世に“海の道”のもった意味を捉えることができる。（思考・判断）

4 本時の展開

教師の働きかけ	生徒の活動・意識	●教師の支援○指導上の留意点
今の鹿島町の沖に室町時代の朝鮮製の陶磁器が沈んでいたことを説明する。	・陶磁器は中国や朝鮮から輸入していたことは習った。	
なぜ沈んでいたのだろうか。	・貿易船が沈んだから。 ・どこかから流されてきた。	●勘合貿易のルートを示す。
資料から推理してみよう。 班でそれぞれの推理を発表し合おう。 班ごとに推理をまとめよう。	・出雲にも特産物があったんだ。 ・「明史」に安来や白潟や美保関の名前がある。 ・尼子氏は中国や朝鮮と貿易をしていたのかもしれない。	○資料を各班に１セット配る。 ○班員それぞれが資料を分担して読み取るよう指示する。 ○資料から気づいたことをノートに書いておくよう指示する。
それぞれの班の推理を発表しよう。	・勘合貿易だけでなく出雲の守護や地頭も中国や朝鮮と貿易していたようだ。 ・奥出雲の鉄を宍道湖や中海をとおって美保関に運んで輸出していたようだ。 ・利益を得るために貿易をしていたようだ。	●発表で，でてきた地名を板書し生徒がイメージをもちやすくする。
ワークシートに貿易ルートを想像して記入してみよう。 今日の学習でわかったことや気づいたこと，気になったこともまとめてみよう。		●関，津，潟，浜などは海と関わる地名であることをつげる。 ●尼子氏が海の道をおさえて力をつけていったことをおさえる。

【分科会の整理と総括】

1　授業者からの授業についての説明及び自評

（小学校）

・小学校社会科授業の特徴は，具体的な子どものくらしから問題を実感できるように導入していくことである。今回は普段見慣れた景色や気温，降水量を手がかりとして，ほぼ同経度にある地点を選び，気候を切り口に国土の特色をとらえさせようとした。

・本時で提示した雨温図と秋の特徴的な風景写真が三地点（松江，高松，高知）であったが，複雑な要素が盛り込まれており，子どもの資料読みとりが難解であったかもしれない。

（中学校）

・中学校社会科の歴史的分野では，歴史を通史として扱う。したがって自分の住んでいる地域の歴史を扱う際には，トピック的に取り上げることになる。今回は子どもたちの興味・関心がより一層高まるように，朝鮮でつくられた陶磁器が出雲沖に沈んでいた謎を解き明かすという設定で授業を構想した。

・本時で提示した史料は，陶磁器が沈んだ謎を解き明かす上で，学問的史料としても中学１年生にはかなり高度なものであった。自分で仮説をもつにしても，かなり個人差があり，その点についてもう少し配慮する必要があった。

2　質疑応答

（小学校）

・小学校５年はいわゆる地理的学習の完成期である。中学年の内容との十分な関連を図っていく必要があるのではないか。確かな基礎学力の定着という側面と，高度な応用力を身につけさせるという側面をどうマッチングさせていくかが課題である。

・小中間で教員が双方の指導内容を十分に把握していない実態がある。相互乗り入れは可能か。またその効果はどのようなものか。実施している市町村があれば実態を教えていただきたい。

（中学校）

・グループ学習が展開されたが，教師から渡された史料は複数あり，そのレベルもかなりちがっていて，子どもの読み取りにもかなり個人差があった。共通の史料を提示する方法もあったのではないか。

・小学校と中学校では，教師がイメージする授業像に根本的な差異がある。そのことを前提として，小学校として大切にしたいこと，中学校で大切にしたいこと，双方で共通して大切にしたいこと等を整理して授業像を構想していくと，一貫教育の具体像が見えてくるのではないか。

3　指導・助言

・一貫教育を考えていくためには，何を念頭に置くべきか，それを授業の事実，子どもの学びの実際から抽出していくことが大切である。

・社会科学習を積み上げていく中で，子どもの認知的なつまずきを解消していく上で，社会科としてどういう手だてを講じていけばよいかという側面が弱い。そのためにも，社会科の内容の系統と学び方の系統に基づいて，子どもの社会認識を形成していく筋道を明らかにしていかなければならない。大まかにいえば次のような三つのステップに分けられると考えられる。

①社会的事象を自分に引きつけて分かるわかり方の段階（生活科的わかり方）

②自分の生活経験と照らし合わせ納得し，実感的に分かっていくわかり方（小学校）

③自分のもつイメージを対象と対話しながら豊かにしていく，より主体的なわかり方（中学校）